

夏の谷で

夏の光が記憶をはこぶ

意識の軋む音に空間が涙する風景をわたる
影に屈折する空

飛翔する鳥の墜落感をなぞる掌

谷の彩り 草原にそよぐ紫の花

勿忘草 思考する花

花粉が思考をはこぶ 観念と実在をつなぐ橋の上

彼岸を望む夕暮の赤い悲しみに

澄んだ記憶を確かめる流れの風景

少年は実在を求め

街並の眩しい光を瞞める悼みが流れる

世界に父の観念を埋めこんだ日

支流の谷を遊行する歩みを

林の鳴き声に夢が散乱する

ミンミン蝉の鳴き声が記憶に突き刺さる

澄んだ流れの響き

うす緑色の背に透けた羽根の

山々に包まれる街の生の清らかさを

少女の歩みのひとつひとつが時間に埋める校庭

少年は世界を求め

谷を挟んだ木々の囁きが語りかける物語の地平

夏の空の深い青に聞き入る瞳

小さい雪片が形つくる雲の世界

うす緑色のミンミン蝉

透けた羽根が町のイメージを鮮やかにする

谷を挟んだ木々の囁き

夏の雲のくつきりとした壁画を

小さい雪片の形づくる煌めく陽のなかの

遠くに少年の影が歩く

滅びの放射する夕暮れ
谷に点在する沢が静かさに沈むと
沢蟹の散歩の時間がはじまる
赤やおど色の甲羅
わき腹にむらさき色を彩る甲羅
孤独を愛する君ら
一生を清らかな淡水に生きる君ら
少年の記憶に生きている君ら
神秘的な眼を世界に向ける君ら
孤独の夢を少年は歩く

遠い夏の日
少年は沢に遊んだ
少年は沢蟹と遊んだ
少年は沢蟹に戯れた
少年は沢蟹の缺をもいだ
少年は沢蟹の足をもいだ
少年は沢蟹の眼をもいだ
記憶は少年の生に突き刺さっている

歩みの音が光に沈む夕暮れ
記憶に追われる山あいの町の夏に
生きる愛に充ちていた遠い時を
遊びの愛に充ちていた谷の沢を
登りつめる足に
勿忘草の匂う流れに
風景が遠い少年を描くと
時間が夕暮れに凝集する

沢の岩の黒い影
濃縮した淀んだ大気に埋もれ
澄んだ水に沈めた手を沢蟹の缺が咬む
それは 重い記憶に沈みこむ意識を切り裂く
少年は和解の疼痛に微笑み
和解の世界に静かに微笑み
稜線を染める赤い夕日を贖める
すると 光が少年を透明にし少年は谷の風景になる

不安な夢のように不安な風景に

誰かが描くあすの空に 時計の音がぶらさが
っている きのうのようにきょうが死ぬと
記憶がふりかえるとき 街の夕暮れを眺める
奇妙に不安な 君の観念たち が怯える輝
きに濡れた稜線を 皮膚が歩き 街の舗道を
はるかに眺める 彼方に佇む 奇妙に不安な
世界の観念たち

学校が不安だ
工場が不安だ
事務所が不安だ
建物が不安だ

街路が不安だ
坂道が不安だ
地面が不安だ
地球が不安だ

空気が不安だ
風が不安だ
時間が不安だ
概念が不安だ

青い夏の午後に
かつてさようならと言った街に佇むと
きのうのたたかいたかいのように
梢が揺らぐ気配に
少女が微笑む 明るい母の記憶と
世界が墜ちる水平線の煌めきの
夏の午後に
いつものように君は街を歩いている

校庭のそよぎに少年が死んだ
風の季節
雲のあわいでかすかに鳴る音に
朝の観念が裂ける

白い風景

皮膚にすべる

心に折れこんだきのうの世界

いつものように君は街を歩いている

君は夢見た

絵本の形をした学校を

君は夢見た

地球儀の形をした学校を

むらさき色の夜に匂いを贖める

静かにひびわれる彼岸に似る記憶

遙に遠い響きのなかで

目眩く白い響きのなかで

軋む観念 街の形 建物の形

暗い夢の刺 描かれる絵

壁に消える影に似た世界

いつものように君は街を歩いている

君は夢見た

こつもり傘の形をした工場を

君は夢見た

ミシンの形をした工場を

ビルディングの壁のなかで

きのうの夢を数える深い色の

爽やかな気配の叫びをくぐる

きょうの刻

いつか人々が顔を失う窓の

豊饒な雲の遊戯を求める手の動きが

墜ちつづる日

いつものように君は街を歩いている

君は夢見た

ノートの形をした事務所を

君は夢見た

くつ下の形をした事務所を

深い 深い 叫び

遠い 遠い 色彩

砂漠に沈んだ夕暮れのように

影のない 君の舗道

墜ちた輝きのひとつひとつをとりかえそうとする眩き

誰かが愛を語りはじめた

夏の午後に

形と形が不安なのだ

思惟の行方

彷徨う眠り

彷徨う目覚め

彷徨う歩み

生の確かさを探る知のなぞり

実在の確かさを探る書のなぞり

空転する世界の時間を歩く君

空転する観念を彷徨う君

君は他者を愛することができるか

荒れた風土

廃墟の土の上で子供たちの眼は美しい

幼いもの達の語る愛

学校に行きたいと語る

医者になりたいと語る

先生になりたいと語る

人のためにつくしたいと語る

かれらの眼は澄んで輝いている

今ぼくらの生

生きることは淋しい

生きることは哀しい

生きることは辛い

夕暮れに佇む橋の上

彼岸と此岸をつなぐ橋の上

思惟の行き悩む橋の上

ぼくらの核は掌から零れつつける

他者のために生きる

同胞のために生きる

神のために生きる

堪える生の 意味を深める

今 世界に意味を与えはじめた生

かれらの生の輪

ぼくらの生の輪

それらは重なりあい重なりあわない

だが 世界のすべてのこどもたちが
ただ 哀しいだけの人生をおくらないように
世界のすべてのこどもたちが

ただ 寂しいだけの人生をおくらないように
信仰篤い神への愛が争いを生みださないように
爽やかな空よ

無限の形を生む雲よ

あなたがたの掌がこの地球を覆う日を贖めるため
そして

世界の不幸に対峙できる言葉のため

ぼくは

谷の音に耳すます岩に佇む